



TITLE:

近江と天文学：巻頭随筆

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 近江と天文学：巻頭随筆. 天界 1942, 22(254): 243-245

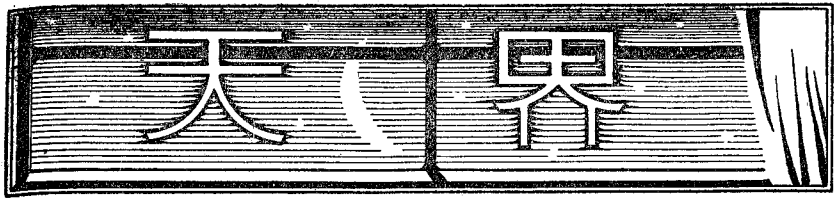
ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168418>

RIGHT:



第254號 (第 22 卷)

(昭和17年) 第 8 號

卷頭

隨筆

## 近江と天文學

Astronomy in Omi.

山本一清 *Issei Yamamoto.*

去る五月25日の午後、田上で、天文臺の落成式を舉行した席上、自分は來會者諸賢の前で、“近江と天文學”と題する紀念講演をした。此の日、集まれた人々は郷里に縁故の深い滋賀縣人が多かつたからである。近江は、“近江商人”の名によつて、全國に知られてゐるため、他府縣の人々は、滋賀縣人を、すべて商才の有ち主とのみ見てゐる。しかし、琵琶湖をめぐる近江は、可なり廣くて、又、各鄉村に著しい特徴や、性格がある。“近江商人”の産地は、言はず、湖東の一局部に限られ、主として、蒲生、神崎の2郡が其の出身地である。之れに對して、犬上郡は彦根の井伊藩權の土地がらであり、又、湖南一帶は膳所の本多侯の權力下であつた傳統が、今尙續いてゐる。甲賀は堅實な士風の盛んであつた土地であるし、又、滋賀高島の兩郡を含む湖西地方は素朴な漁農地である。高島に現はれた中江藤樹の感化は今も尙、この郷土にあまねく見られる。——こんなわけで、近江人は、皆が決して商人ではない。京都を養ふ資源地として、昔から近江の産業は農工漁等に重きを置かれたが、全國的な交通の要路を握してゐるため、古來、幾度か、戦亂の巷となつたこともあり、又、あらゆる學藝との接觸も頻繁であつた。近江と天文學との因縁も、決して少いわけではない。

自分は“近江と天文學”を講演するに當り、其の劃期的な人傑として、天智天皇、平石時光、紀正民、國友一貫齋、水原準三郎、中村要の6人の名を挙げた。普通は、東洋古來の天文學者として、本格的には多く、曆學者が挙げられる。けれど、東洋の天文學は、其の殆んど全部が曆學を中心としたものを傳統としてゐるからである。しかるに、今、この代表的な近江の天文家を見ると、帝王あり、藩侯あり、武士あり、工匠あり、數理家あり、技術者ありと言ふわけで、天文家としてのブリエテに富んでゐる點に於いて、恐らく他府縣に其の比を見ないだらう。世には、天智天皇を以つて近江人とするものの不心得をな

じる人があるかも知れない。しかし、我々滋賀縣人は、我が國最初の“帝都”を大津に開き給ひし天智天皇を、近江人の大親として、謹慕し奉る特權を誇るものであり、殊に最近年、近江神宮の創設せられたことによつて、一層親しく此の聖帝の御神前にぬかづく機會を 恵まれたことを、感謝感激するものである。

天智帝（在位、學曆661—670年）は我が國の文化史上に於ける中興の英主にましまし、さきに大化の改新を斷行して、學藝百般の基礎を定め、天文臺を建設し、標準時制を定め、御親ら漏刻（水時計）を作り給ひし君主である。我が日本の天文學統は、實に此の時に始まつたのである。

平石時光（1696—1776年）は、彦根の井伊藩の一家老に生れた武士であるが、生來、數理を好み、長じて京都の諸家と交通するうち、深く曆學を究め、遂に實曆の改曆に參劃して、之れを大成せしめた學士である。

紀正民（1790—？年）は、後に堀田正民侯として知られた人で、近江（坂田郡）宮川藩主である。若年の頃より書畫を良くし、其の花鳥畫など、既に廣く世に知られてゐる。この人が、一ケの望遠鏡を用ゐて、文化10年（1813年）の夏、月球を觀察し、之れを紙上に書いたものが現存してゐる。侯の天文記録は此の前後に何ものも無いので、研究資料としては甚だ特異なものであり、又、之れに對する吾々の研究も未だ不充分なのであるが、大略は天界第123號に自分が發表した通りである。

紀正民の月面圖を研究しようとして、圖らずも自分が發見したものは、國友一貫齋（1778—1840年）の天文事蹟であつた。一貫齋は近江の長濱に在りてゐた幕府御用の鐵砲鍛冶であるが、家傳の金工職と金屬鏡製作の貴重な經驗から、たまたまオランダ舶來のグレゴリ式反射望遠鏡を見て、直ちに之れを模した優秀品を作り、更に之れを以つて1833—1836年間、日月諸遊星の觀測研究を熱心に實行した人であつて、之れも天界第142號に自分は略述した。一貫齋は獨學創意の天才であつて、官僚學者の糟粕を嘗めず、15ヶ月間にわたつて、毎日2回づゝ太陽黑點の觀測を行ひ、その他、月面や諸天體の現象を研究した功蹟は、實にガリレオとハッセルとを兼ねたものと言ふことが出来るのであつて、我が學史を飾る異才である。

水原準三郎氏（1857—1908年）は、我が國の、明治年間に於ける天文學界の一先輩であつて、蒲生郡常樂寺村の産であるが、明治16年に東京帝國大學の星學專科を卒業して、直ちに東京麻布の天文臺に奉職し、編曆の主任者として、又、その他、彗星、經度、計算法等の研究者として、多くの學蹟を遺し、明治41年六月26日に長逝した。生存中、寄行に富み、多くの逸話を有つてゐる。詳細は天文月報第1卷第5號にある。

中村要氏(1504—1932年)は、滋賀郡眞野村に生れ、大正昭和の兩期にわたり、京都帝大の天文部の一員として活躍した事蹟は、本會員中の大多數が熟知してゐられることと思ふ。氏は比較的若年で逝つたが、其の行蹟は、流星・彗星・變星・小遊星・太陽・火星等の各分野に於いて開拓的な觀測を勵んだのみならず、天文器械の研究に傾倒し、殊に、反射望遠鏡の製作に於いて前人未到の新境地に進み、晩年には更に大レンズの研磨にも着手して、夥しい優秀作品を世に贈つた天才である。氏の感化や足蹟は今尙、國內到る所に見出され、又、多くの追従者や、後繼者を出してゐる。若し氏が無かつたならば、最近年の我が國の天文界は、頗る單調無味な歩みのみを見るに止まつたであらうことを、識者は誰でも知つてゐる。

“近江と天文學”の紀念講演を終るに當つて、特に此の田上の郷里に建つた天文臺の落成を見た人々に對して、自分は、是非一言、“田上隕鐵”のことを述べざるを得なかつた。之れは吾々の義務でもあり、又、特權でもある。

田上隕鐵は、明治18年(1885年)に此の田上の奥山の某地點で發見されたもので、重量170キログラム(46貫)、實に我が國第一のものである。今この隕鐵は東京の科學博物館に陳列されてあるが、この珍らしい天體の存在を、我が郷里の人々は、不思議にも、殆んど誰も知らないのである。自分は此の郷里人の無智識を残念に思つてゐたので、丁度この落成式の席上に於いて、可なり詳細に此の解説をなし、郷土の新しい誇りを茲に一つ紹介し得たことを喜ぶものである。——と同時に、此の日本最大の隕鐵が、其の發見者によつて“田上隕鐵”と命名されたことを喜ぶものであるけれど、學界一般は此の貴重な隕星の名の呼び方を、今日まで、殆んど皆誤つてゐた點を、是非修正して頂きたい希望を、近江人として、又、田上人として、有つものである。“田上隕鐵”は、正しく“タナカミ隕鐵”と呼ぶべきものである。(終)

### 時刻の改正に際して

鐵道省は來る十月1日から愈々時計の“午前”“午後”を廢して、24時間ブツ通しの呼び方に改めると言ふ。24時制は、吾々天文人は多年既に實行してゐるのであつて、又、之れを一般社會が採用するやう、永く主張し續けて來たものである。殊に今尙“午前”“午後”を用ひてゐるのは、英米と支那日本だけなのだから、是非改めなければならぬは明白である。(メートル法反對論だつて、又、華氏の寒暖計だつて、皆、英米流のものだ!一刻も早く改めるべし!!)

今まで24時制反對論者の唯一の論據は、時計の目盛りが12になつてゐるといふことだつた。今後は、新制度に適するやうな新しい時計の文字盤を、時計製造家のために考案してやるが宜しいと思ふ。次號から、本誌上にも、かうした新案を募り、良いのを發表することとしたい。(C)